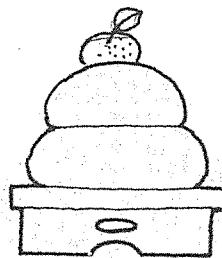


ひまわりからの メッセージ

101号
2020.1.20
NPOひまわりの花内
西濃農園
発達障がい支援センター
発行人：中野たみ子

令和二年

年のはじめに



新しい年が明けました。

貧しく、しかし、それは控え目に相手を尊重し、相手を思いやつた上でのことと解釈してもいいでしょうか。師はある時、私がそれが足りないとお思いになつたのです。厳しくもあたたかな文面でした。ところが長文のその手紙は私が手文庫の奥深くしまい込んだらしく、どうにも見つけられません。読み返すことができないのを勝手に解釈をして、今のところ私の生き方は師の許容範囲にちがいないと甘く考えたりしています。

二〇二〇年。今年はどんな一年になるのでしょうか。

今朝、まだやっと白みはじめた朝の気を裂くかのように、鶴が鋭い声で仲間を呼ぶのが聞こえてきます。今年は雪もなく穏やかですが、山に食べものが無くなつたわけでもないだろうに……と思いつつ、集まって来たりひよどりたちの啼き交わす声を聞きつつ、このメッセージを書いています。

我が家の中の柿はとうに鶴たちの餌になりましたが、そこのうちには木の実も無くなつて、春になると鳥たちが落としていった実から又新たに木々の芽が芽生つことがあります。広辞苑を引くと「ふし」「二十四節氣」などがあります。広辞苑を引くと「ふし」「二十四節氣」などの後、六番目に「志を守ること」七番目に「ほどよくする」と、控え目「が出てきます。自分が正しいと思つことを

私の短歌の師でもあり、宮中の歌会始めの選者もつとめた千代國一は、私に「節」と「う」とを諭してくれたことがあります。広辞苑を引くと「ふし」「二十四節氣」などの後、六番目に「志を守ること」七番目に「ほどよくする」と、控え目「が出てきます。自分が正しいと思つことを自然体で……と思つています。

「娘の名は美帆です。」

「福祉に身を置く者とて思うことく

ない牛肉を客に出すといつことが父には許せないことがたのじょう。偽善者といつ思ひが父の中にはずっと残つていて、娘がそんな道を歩むことは許せないことだったのだと思ひます。

新春早々、津久井やまゆり園の事件の公判が始まりました。その前日に遺族の方から申し出られたのが、一九歳で亡くなつたお子さんの名前の公表でした。「娘を記号で呼はれることに耐えられません」とおしゃつたお母さんの胸の内を思い、また、名を秘さなければならぬ多くの遺族の悲しみを思ひました。福祉の輪が広がり、障害者差別解消法が制定され、それでもなお差別に苦しむ人たちが多い世の中に怒りと哀しみを禁じえませんでした。

遠い昔から、人の社会の中で差別は存在していました。ある地域では、墓標にさえ獣という字が用いられたと聞きますし、幼い頃には鉄格子のはまつた家や屋敷の中に世間の目からかくすことが決して珍しくありませんでした。そして福祉は、慈善と考えられていました。

私が福祉の道へ行きたいと言つた時、父に反対をされました。事業家として日本でも有名な施設を慰問したことがあります。父は、その児童施設ですき焼きの歓待を受けたそうです。貧しい時代に、子供たちの口に入る二つの

に雄
光一
糸賀一雄先生に出会つたことは大きかったと思ひます。

「この子うに世の光を。」ではなく、「この子うき世の光に。」といふことばは、半世紀前の施設の中でどんなに大きな転換点になつたかもしれません。この「を」と「に」の違ひは、まさに、主体は障

がいさもつ子どもたち自身なのだといつ点で画期的なものでした。障害の考え方も、この五十年でずいぶん変わつています。ICIDHの「疾病を中心とした考え方」から、ICIDTの「生活モデルへ、そして社会モデルへと変わつてきているのです。そんな中で思い出すのが五十年前に文部省の高官が聞いだことです。

特殊学級(現在は支援学級)の担任には、その学校の中でも人格的に最もすぐれた人材を当てるべきだ。

その通りです。全く違う人の児童生徒に対して、その「人

ひとりに適した教材を考え、その力を發揮できるような取り組みをしていくのは、至難の技と言わざるえません。そして、その根底に無ければならない人間観は、ふとした日常の言動にあらわれるのです。

かつて私はひまわり学園に在籍し、何人が園長の下で働くました。そこで若い頃に出会ったのが北山彌索園長でした。赴任された時、まだ五十歳にならなかったかもしれませんでした。運動会練習の時のこと、休み時間になった時、ある職員がお茶をいれて、職員に配りました。その時、いつも穏やかな北山園長は、「まちがってへんか?、子どもが先と違うか?」とおっしゃったのです。当時の学園は肢体不自由の子が多く、要求を「こども表す」とも出来ない子どもたちばかりでした。職員が暑いことは「当然子どもたちも口がかわい」といふではないか、そこに配慮できないといふことは、どういうことだ。焼きの話を思い出しだのでした。

本当に何気ないでいるのですが、でも心に残ったであります。

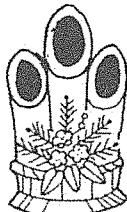
大学卒業間近に、滋賀県に一つの施設ができました。今は東近江市になりますが(当時は能登川町でした)、

福井達也さんとクリスチヤンの方が資金集めをして

おられました。

福井さんは、重度の知的障がいの子に出会い、その子が牛小屋の穴の中に入れられるのを見せて「何でひどいことをするんやー」と怒鳴ったといいます。すると母親は涙ながらに「この子を外へ出せばひどい目にあうのです。ここに居るときが幸せなんです」と答えたそうです。この子をこんな目に合わせたのは、実は自分も含め、差別してキド私達なんだとか、とった福井さんは「止揚学園」を作られたのです。設立当初、子どもたちが体から受けける感覚を大切にしようと、洗濯は全て手洗いでした。夜尿の布団は、翌日には新しい布団と取りかえられて、おしゃりの臭いがしみついた布団で寝かされることはありませんでした。園内には花が活けられた花びんが置かれ、子どもたちが五感を使えて快いものが感じ取れるようだと工夫されました。でも今は、福井さんも七八歳創設者の思いも受け付がれていないうだろ?などと思いつつ、検索してみました。ありました! 福井さんはもう九十歳近いです。

「子どもたちのためにではなく共に……」という想いをずっと貫いておられるのだと嬉しくなりました。そして、五十年ぶりに訪れてみたいなあと思いました。



だらだらと書き進んでしまいましたが、私が出会った多くの先駆者たちは、決して専門家ぶりたり、自分が優位に立とうとしており、障害をもつ子どもたちや大人の方たちを差別したりすることはありませんでした。「何かをしてあげる」のではなく、共に歩もうとする思いが常にありました。

今、世の中は資格が大きな額をして歩き回る世の中になってしまふと思います。資格をもつ者が無い者を見下すという光景を目にすることがあります。福祉施設では、個別の支援計画を作成しなければなりませんが、国も県も「保護者と共に作るもの。難しい専門用語を使わずに、保護者がわかる」と書きました。「どうぞ」と指導しています。どんなことばを使って書くのか、そんなところでも障害をもつ人や子どもたちにに対する心の有りようが垣間見えるのです。

福祉にかかる人たちが増えたことは喜ばしいことですが、反面、津久井のように施設職員の心のもち方が問われてきます。保護者の方が安心だと信じていた所で起きてはならない事件でしたが、私達自身の心の中にさしきみの心や差別感がないのかどうか、問い合わせいく必要があるのでないでしょうか。

からかいや苛めは、あとを断ちません。子どもたちがそ

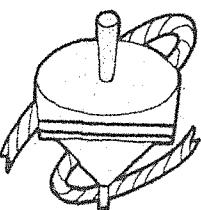
ういう行動に走る要因に、私たち大人の価値観が大きくかかわっているのではないかでしょうか。

徐夜の鐘がうるさい、小学校の鼓笛をやめさせろ、アパートやマンションのトラブルなど、大人世界の問題は、いつのまにか自分以外の邪魔なもの排除していく、こうしていくところに行き着いていくかと思います。社会全体が大うがたを無くてきているのもそれますが、私もそうならないようだ……と思います。

次回のセンター親の会は

2/10 ソフトピアノセンター

10F 中会議室



前回「ネットやスマホについて 子どもたちの方が詳しくて、親がついていけない」「ロツフルでも、子どもは解除方法を知っています」などという意見が出されました。そこでネットにお詳しい不破高校の田中智樹先生にお話を伺います。お知り合の方を誘って来て下さい。